

東日本大震災から10年 倒壊した鐘楼 門信徒に支えられ再建

# 「この音、届いていますか」

東日本大震災の津波で、宮城県名取市の明観寺（三浦善詔住職）は門徒18人が亡くなった。寺に津波の被害はなかったが、地震で本堂は躯体がゆがみ、鐘楼は揺れる釣鐘の重みで倒壊した。

震災から1カ月半後の2011年4月、大切な仏具を重機で壊すのは忍びないという三浦住職の願いで、仙台



地震で倒壊した鐘楼はボランティアの手作業で解体された  
(撮影＝2011年4月26日)

別院災害ボランティアセンター（仙台市青葉区）の活動者が鐘楼を手作業で解体する様子を取材した。三浦住職はボランティアとともに汗を流して瓦や折れた木材を運び、慶子坊守は「朝夕に撞き、地域の方が生活の一部と愛してくださった鐘を失ってしまった」と肩を落とした。

同寺は震災の翌年に本堂を改修。鐘楼は7年目の2018年に建て直し、釣鐘は地震で揺り落ちた元の鐘が吊られた（写真）。「ご門徒も皆さん被災されて

いる中、お寺のためにと募財を寄せてくださった」と三浦住職。「中には、『年金もらったから使ってくない』と言ってお寺に来ては、毎月1000円ずつ納めてくださるおばあちゃんもいた。そうした温かさに支えられた」。

現在鐘は、震災後に移り住んできたご近所に配慮して朝はやめ、夕方6時に6打だけ撞く。鐘の音に誘われるのか、今も時折、地域の方が悩みを抱えて寺を訪ねてく



るといい、そんな時は三浦住職が優しく耳を傾け、慶子坊守が温かいお茶でもてなすのだという。

慶子坊守は「この10年で多くの方が亡くなり、あのおばあちゃんも鐘の音を聞くことなく亡くなられた。鐘を撞く時は、皆さんを思って『この音、届いていますか』と心の中で呼びかけています。それくらいのことしかできないけど」としみじみ語った。(1面に関連)